

題目： Test of the “Independence of Irrelevant Alternatives Condition” in a Small Group Decision-Making Context

小集団での意思決定の場における無関係対象からの独立性条件の検討

氏名： 造田 大輔

指導教官： Alan S. Miller 教授

この実験では集団での意思決定が合理的であるために満たすべき条件のひとつである、無関係対象からの独立性条件の妥当性を調査した。無関係対象からの独立とはある二つの選択肢に関する選好が、他の選択肢の存在によって覆ってはならないというものである。ところが、人々はいくつかの選択肢を評価するときには許容ポイントのようなものを定めていて、更に各選択肢が許容であるかどうかは単純に個々の選択肢を評価しているのではなく他の選択肢も含めて考え合わせているというアスピレーションレベル理論を用いると、無関係対象からの独立が成立しないことがあるのではないかと予想し、実験を行った。

今回の実験では、ある少年院から仮出所する少年1人を、山田、鈴木、伊藤という3人の少年の中から4人1組で話し合って選ぶという課題を用いた。話し合いの際には個人に3人の少年についての生活記録が渡され、その中の山田と鈴木の選好順には無関係な、伊藤という少年に関する記録を操作し、個人の選好の調整を試みた。実験条件には2通りあり、条件1では山田だけが仮出所にふさわしいと思う人2人と山田と鈴木の両方が仮出所にふさわしいと思う人2人が話し合うように、条件2では山田と鈴木をふさわしいと思う人2人と、鈴木のみをふさわしいと思う人2人で話し合うようにした。つまり、条件1では山田支持者が4人、鈴木支持者が2人ということになるのでグループの決定として山田が選ばれ、条件2では鈴木支持者が4人、山田支持者が2人となるのでグループの決定として鈴木が選ばれると予想した。この仮説通りの結果が出ると、伊藤という無関係な対象によってグループの選好順が変わったことになる。

グループが仮出所する人として選んだ少年についてのクロス表、話し合い終了後に被験者に尋ねた、グループの決定に対する自信の度合い、グループの決定の妥当性に関する被験者の評価、被験者が話し合い後にどれだけ3人の少年についての情報を覚えていたかを調べる記憶再生テストなどのデータを検討したが、優位な結果は得られなかった。

今回の実験では仮説を支持するような結果を得ることはできなかった。今後、話し合いがどのように進められたかをもっと詳しく知ることや、実験の課題や状況を改善の必要性があるだろう。